

この地に宝あり

「化石の山」から300個

亡夫が採集、大垣の施設に寄贈

大垣市赤坂町にある金生山きんせいざんは「化石の出る山」として全国に知られる。同市田町1丁目の近藤ゆり子さん(59)は13日、夫の正尚まさなかさん(98年に53歳で死去)がかつてこの山を歩き、拾い集めた約300点の化石を、同市の「金生山化石館」(橋本秀雄館長)にそっくり寄贈した。子供たちに水と生物の歴史に触れてほしいと考えたからだ。

夫の正尚さんは、平家物語を琵琶で語る「平曲」の数少ない演奏家の1人だった。途絶えることを心配し、すでに語られることがなくなっていた曲の復元作業にも取り組んだ。同時にダム反対運動の中心人物でもあり、97年の知事選にも立候補した。

赤坂育ちの正尚さんは、幼少期、金生山で化石拾いに興じ、東京から大垣に戻った後の80・90年代前半、日曜日になると、再び化石探しによく出かけていたという。いいものは少ないというが、これまで庭にゴロゴロと雨ざらしになっていた。

同市教委・文化振興課を通じて金生山化石館に連絡し、同館で小学生の教材などに利用してもらうため、寄贈することに。13日朝、橋本館長ら7人が近藤さん宅を訪れ、普通トラックと軽トラックの2台で約300個を運んだ。

中にはウミユリ、フズリナなどの見事な化石も。近藤さんは「私が見て、タダの石ころで捨てられるのはもったいない。化石は地球が『水の惑星』であること、そして生物の長い歴史を気づかせてくれます」と話している。



近藤ゆり子さんの夫・正尚さんが集めた金生山化石の一部。フズリナの文様が鮮やか

(高岡喜良)